

住民参加型「田んぼの草花調査」手法の開発

研究のポイント

多面的機能支払交付金(旧農地・水・環境保全向上対策)などでの「生きもの調査」活動を想定し、植物知識の多寡に関わらず、参加者の誰もが満足できるような方法を開発しました。

研究の背景

- 「生きもの調査」は、農村が有する生物との触れ合いから、農業や農村への住民の理解を促進します。
- 水田畦畔にみられる「草花」は、カエルや昆虫などの生息に大きな影響を及ぼしています。
- 魚類やカエルなど動物の調査法の提案はありましたが、畦畔の草花についてはありませんでした。

手法の概要

本手法の概要は右図のとおりで以下の特徴を有します。

- 新たに開発したポケット版の専用図鑑を用いることにより、全国の畦畔で草花調査が可能
- 参加者の人数や属性、植物知識の多寡に応じて、調査活動プログラムを簡便に設計可能
- 調査票の工夫や地域の植生の健全度を図る指標の提示により、継続的な調査活動への参加モチベーションを高めることが可能

適用事例

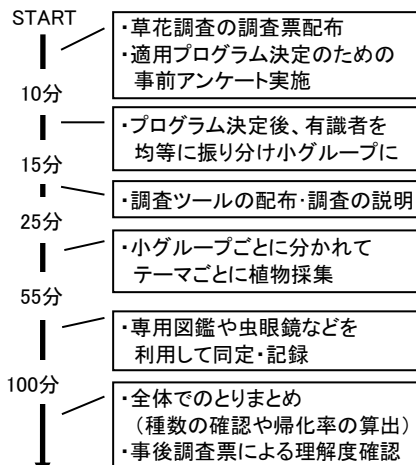
宮城県大崎市の6地区で本手法を適用したところ、全確認草種の6～8割程度が専用図鑑の掲載種で、参加者からは高い満足度が得られました。

開発した「田んぼの草花調査」手法の適用

地区	A	B	C	D	E	F
実施月日	7/20	7/20	8/23	8/23	8/24	9/10
参加人数(うち子ども)	26(15)	12(0)	24(15)	18(12)	6(3)	5(0)
適用プログラム	P6	P6	P6	P6	P5	P4
全確認草種 ^{注1)} (A)	42	63	50	57	48	55
うち専用図鑑掲載種(B)	26	45	37	39	41	44
うち参加者の確認種(C)	16	24	31	33	28	38
(B)／(A)	62%	71%	74%	68%	85%	80%
(C)／(A)	38%	38%	62%	58%	58%	69%
参加者の満足度 ^{注2)}	—	—	90%	75%	100%	80%

注1: 対象畦畔の事後調査で観察された全種数。

注2: 事後アンケート(高校生以上)で、「満足」の感想が得られた割合。



草花調査の流れ(左)と活動プログラムの適用手順(下)

参加者の属性と人数から属性タイプを決定

属性	高校生以上のみ	大人と中学生以下が半々程度	中学生以下が多数を占める
人数	10名以下 10～30名	10名以下 10～30名 30名以上	10名以下 10～30名 30名以上
属性タイプ	A I A II A III	B I B II B III	C I C II C III

属性	植物知識のある参加者(有識者)多数	数名	なし
A I	P1	P2	P4
A II	P3	P5	P6
A III	P5	P6	P6
B I	P2	P3	P5
B II	P5	P5	P6
B III	P5	P6	P6
C I	P2	P4	P6
C II	P5	P6	P6
C III	P6	P6	P6

人数少なく、有識者が多い場合

- ・全出現種を採集、各人で作業(P1,P2)
- ・未同定種の標本作製(P1)

人数少なく、有識者も少ない場合

- ・全出現種を採集、グループで作業(P3)
- ・開花期の草種を採集、各人で作業(P4)

人数多く、有識者が少ない場合

- ・開花期の草種を採集、グループ作業(P5)
- ・花の色を決めて採集、グループ作業(P6)